第１５号
平成21年３月

杜の西北

会　報
早稲田大学
東久留米稲門会
年一回発行

大先輩ふたりがいた!!

――東久留米ゆかりの“稲人”を追跡――

早稲田大学の前身東京専門学校が創立（明治15年―1882年）された翌々年の明治17年（1884年）に第一回「得業生」12人が世に送り出された。早稲田NEXT１２５が開幕して２年目。早稲田大学は、過去126年の間にほぼ６０万人の卒業生を輩出している。

わが町東久留米からは、いつ幾人の卒業生が世に送り出されているのだろうか。そして東久留米ゆかりの第１号卒業生はどういう人なのだろうか。そんな興味の湧き出るままに資料、口コミを頼りに追跡・取材を試みた。結果、二名の大先輩の存在に辿り着いた。以下はこの先人たちの足跡のあらましである。

初代東久留米市長　藤井顕孝氏

後に市内大門町にある浄牧院第３１代住職に就き、東久留米市初代の市長ともなった藤井顕孝氏は大正９年（1920年）早稲田大学文学部史学科に入学、同13年卒業している。大学では世界史を専攻するが、仏教への志も高く、印度よりの仏教伝来につき意欲的に研究した。一方、教育に関しても鋭い考察を加えていた。

署名文字は自筆

藤井顕孝氏は明治３０年（１８９７年）徳山市に生まれ、幼くして仏門に入る。旧制徳山中学時代に福田寺（徳山市）に移り、天寧寺（尾道市）にて岡田大豊老師に師事した後、19歳で天徳寺（福山市）の住職となった。

大正8年に上京し、新宿の天龍寺や杉並の宗泰院に身を置き修業しながら早大に通学した。新宿４丁目に現存する天龍寺には昨年５月、当稲門会ウォーキングを楽しむ会が奇しくも訪れている。

昭和元年(1925年)、東久留米・浄牧院第31代住職に就任、予てより子弟の教育に関心が高かった氏は昭和5年（1930年)に浄牧院女子工芸学園を創設した。また鉄道省嘱託教習所講師、府立第六中学校（現都立新宿高校）教諭、私立世田谷中学（現私立世田谷高校）教諭、駒澤大学講師など教鞭をとり、多い時には一日に数校講義をかけ持ちした。仏教大経典となる「大正新修大蔵経」（全100巻）編纂にも参画している。

昭和１２年（１９３７年）、日中戦争勃発に伴い、華北へ従軍僧（宣撫官）として赴任、一時国籍を離れて、親日政権をつくった汪兆銘の信任の下、山西省政府教育顧問、中華民国新民会厚生部次長、華北合作社事業総会常任監事、新民学院大学教授などを歴任した後、昭和２２年天津より佐世保に復員。久留米村に帰省の日、ヨレヨレの背広を着て浄牧院本堂前で合掌している人がなんと吾が父だったとこの時の様子を子息の第３２代現住職藤井猷孝氏（元東久留米市選

早大時代居住していた新宿・天龍寺

挙管理委員長）は述懐している。

昭和27年、サンフランシスコ平和条約の発効で戦犯指定が解かれ、浄牧院住職の傍ら早稲田予備校・錦城予備校講師、大泉高校PTA会長などを兼任し、久留米町教育委員長を経て昭和３８年東久留米町長になった。昭和４５年には市制を施行し初代市長となった。町長・市長と一貫して理想的住宅都市の建設を標榜し、ひばりが丘、上の原をはじめとする大型団地招致による急速な人口増加に対応して、小学校など各種インフラの整備に心血を注いだ。日本一大きかった町・久留米町を東久留米市に昇格させた功績は大きい。

早大時代の藤井顕孝氏（左端）

３期に亘った町長／市長を５０年１月に辞任、５３年１０月波乱の生涯を終えた（享年８３歳）。

〈昭和４５年（１９７０年）１１月、第一回早大ホームカミングデーが開かれたが、顕孝氏が出席されたかどうかは定かではない。〉

顕孝氏は「安居楽業」を人生の銘とし、マンドリンを爪弾くのを趣味としていた。根っからの甘党で大福餅が大好物。市長時代、酒席でも一切アルコール類を口にせず、清涼飲料しか飲まなかったため、市職員から“ジュース市長”と呼ばれていたと現住職藤井猷孝氏は笑いながら語ってくれた。

三多摩村議会議長会会長　村野七次郎氏

明治３５年（１９０２年）、村野家４代目当主・七次郎（幼名・七之助）氏が生まれた。この年は、まさに東京専門学校が発展して改称された「早稲田大学」の開校の年である。

村野七次郎氏は村立久留米尋常高等小学校尋常科6年、同高等科1年を経て、大正７年４月に早稲田実業学校に入学、同11年3月同校を卒業。次いで同年4月、早稲田大学法学部に進学した。（顕孝氏より２年後の入学である）。当時、既に三多摩地区には府立第二中学校があり、地区内の裕福な家庭の子弟は多くそれに入学したが、氏は官学を嫌い、かつ実学を尚っとしとして早実を選んだ（同氏家人談）。

村議会議長時代の村野七次郎氏

早大入学前後、村野七次郎氏は克明に日記を書き綴っている。往時の学生生活模様、学生気質をそこに垣間見ることができる。

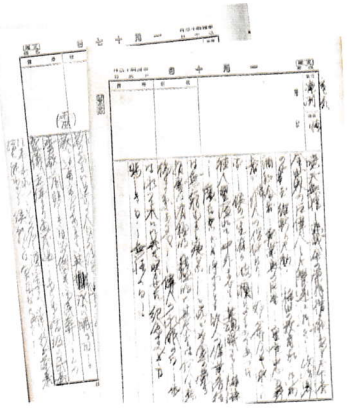
当時のありようとして、学生は親元を離れて下宿するのが当たり前であった。久留米村柳窪の実家から通学しようにも国分寺～川越間の汽車があっただけで、武蔵野線は遠く、西武電車はまだなかった。

氏は早実時代から若松町、馬場下などで下宿生活を送っている。　授業の休講のときなどは、戸山ヶ原、新宿、神楽坂などを散策し、時には銀座まで足を延ばした。休日には、武蔵野館、牛込館、さらに浅草で活動写真を見、菊人形などの催物を楽しみ、早大正門通りに現存するレストラン「高田牧舎」を愛用し、カフェで茶を飲んだりした。

大正１１年（1922年）1月10日、大隈重信侯が逝去された。

村野氏はこの時の心情を感情の赴くままに日記に書き記している。（原文のまま。判読不能な箇所は、・・・・・とした）

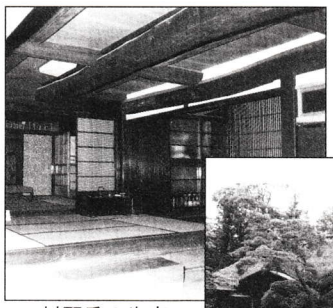
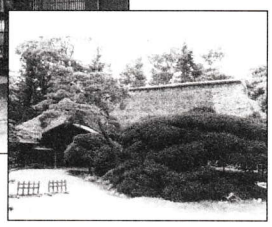
『**1月10日**　噫天無情―悲哉　余の崇拝措く能わざる天下、否全世界の巨偉人―大隈遂に逝く・・。政治界の王、維新の天勳、稀世の教育家、東西調和論者、実業界の巨星―皇室中心主義者、外人の侶伴たり。好々爺・侯の一生涯は波乱そのものであった。往人望溢れて中外までも、英魂眠るも雄弁―口舌開き得ずとも故人の偉業各種は無窮たること疑いなし。されど学園の蒙る損害は消極的積極的に甚大たるは何人も想像する処なるべし。偉人の永眠の日　雨は降って木々に花をさかせた記念すべき日も　悲しき日　無情の日』


村野七次郎氏日記帳より　大正十一年一月

『**1月17日**(大葬の日)　巨人の魂再び帰らざるの日、日比谷へ。民衆も早朝から日比谷へ押しかけた。鶴巻町の交番の近くに清列した。もう9時は過ぎた。ふと右に目をやれば偉人侯大隈の柩が静かにモーターによって近かずくではないか・・、最敬礼は沈黙の中に続く人の流れは或いは走り或いは止まって…愛児の学生生徒は最愛崇敬の厳父を失い…、雪舞い風悲しき日、前例なき国民葬、この盛儀、王侯より魚屋まであらゆる階級の民衆に弔われ…護国寺へ…』

大隈侯葬儀 日比谷公園を埋めた会葬者

同年、父君第三代七次郎が逝去し、氏は襲名して第四代七次郎となる。親族会(当時)より、当主は家に留まるべしとの指示があり、早大を中途退学して家業に就くことになる。尤も、実務修業のため、一時所澤銀行(のち三菱銀行に吸収さる)に入行、国分寺支店に勤務した。所沢町にあった野球クラブに参加して、二塁手を務めたのもその頃であった。



村野氏の生家

昭和4年4月久留米村村会議員選に出馬、27歳で初当選を果した。しかし議員歴は長からず辞職して家業に専念し、終戦に至る。

戦後の地方自治法に基づく新しい自治体の発足に際して、行政を監視する議会こそが民主主義の根幹であるとの考えに立って、新しい村議会に議席を得、初代議長となり二期を勤める(村長には多聞寺住職・番場憲隆氏を擁立した)。三多摩地区の村議会議長会が組織されたときは、推されてその会長となった。

村野氏は　珠算、書道に秀で、持ち前の鷹揚さと人懐こさとで、「天神前の旦那」(天神前は村野七次郎家の屋号)と呼ばれ、村民はもとより近隣の人士にまで親しまれた。

久留米村が町制に移行した年・昭和３１年(１９５６年)、５４歳の若さで生涯を終えている。

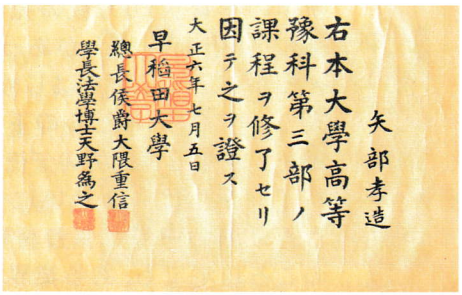
村野氏の生家は柳窪に現存している。武州世直し一揆で受けた柱の刀傷がそのまま残されており、市内外より多くの見学者が訪れている。平成１６年１１月、当稲門会の郷土研究会も郷土歴史を探る一環として当地を訪れている。

＜早大先輩に当たる顕孝氏とは一時期学園で、期を一にしているが、当時東久留米稲門会は存在せず両者の親密な交流は見られない。＞

大隈重信総長署名の修業証書

今回の先達探索で、興味深い資料にめぐりあった。

市内神宝町に在住する矢部不三雄氏(東久留米稲門会会員・昭和27年・教卒)の実父・矢部孝造氏は大正5年(1916年)に早稲田高等学院に入学、同7年に早稲田大学文学部英文科に進み同11年3月卒業している。上述の藤井顕孝／村野七次郎両氏より早稲田の先輩に当たるが、本人は東京市牛込区天神町の稲人にて、東久留米にはゆかりはない(子息の不三雄氏が東久留米に居を構えたもの)。藤井/村野両東久留米ゆかりの大先輩の早稲田時代に近接する早稲田の様子を示す貴重かつ興味深い資料が息子の矢部不三雄会員によって保管されていた。往時の参考に供したく、これら資料の中から大隈重信総長/天野為之学長連名の修業証書(早稲田大学高等予科第三部)の一葉を借用して右に掲載した。


矢部孝造
右本大學高等豫科第三部ノ課程ヲ修了セリ因テ之ヲ證ス
大正六年七月五日
早稲田大學
總長侯爵大隈重信
學長法學博士天野為之

わが早稲田時代

「早稲田即是空」

国米　家己三（昭和三十一年・政経）

もう半世紀以上も前になるが、早大受験のため初めて上京した冬の日のことが忘れられない。

東京駅に着いて東海道線から山手線にホームを移動、やがて電車がきて扉が開き、一歩車内へ。そのとたん、私は思わず驚きの声をあげた。「えっ、なんだ、これは！」。窓を背に座った7、8人の乗客の顔が、みな同じにみえたのだ。わずか数秒、いや、ほんの一瞬だったかもしれない。できたての“おのぼりさん”の幻覚か。いちど深呼吸をし、改めてじっと目を凝らす。なんだ、若い人もいる。年配者もいる。女性もいる。ホッとして、吊り革に手を伸ばし、さて、さっきの「みな同じ顔」は何だったのかを考えた。そうか、郷里の岡山で進駐してきた米軍のGIが何人か並んでいるのを初めてみたとき、やっぱり連中、みんな同じ顔だった。アメリカの文化、東京の文化、それぞれの文化圏がつくる同じニュアンスの顔というのがあるんだな。以来、電車のなかや街頭で、人をみるのを楽しむようになった。アルバイトでもマン・ウオッチングに精を出す自分に気づいて、人知れず苦笑した。

大学では、教室より、文学部地下にかよった。そこのアルバイト募集の掲示をみるためである。在学中はずうっと、バイトに明け暮れた。後年、「大学時代、きみの専攻は何だった？」と問われると、答えはいつも決まっていた。「専攻はアルバイトです」。

大学1年の11月、ある大手企業の会長が国政選挙の全国区に立つという。ついては早稲田の学生30人ばかりがきて、新年の年賀状10万枚の宛名を墨書してほしい、という求人があった。同社の本社ビル・5階で仕事をはじめたが、12月に入るとすぐ、そのビルの下をボーナス増額を要求する官公労のデモ隊がとおった。バイト学生はいっせいにデモ隊をみようと5階の窓際に張り付いた。私は、そのころ自宅でも、ある業界紙の帯封の宛名書きをしており、この日、たまたま余った帯封の束をもっていた。それを小さくちぎって、5階からデモ隊に向けてばら撒いた。デモ隊は隊伍を崩してそれを拾っていた。「オレにも撒かせろ」という学生もいたようだ。

大学四年　田無の下宿にて

デモ隊は去り、学生はまたいつものように仕事に。ところが、50代の恰幅のいい男が私たちの部屋にやってきて、いまビラを撒いた者は手を挙げろという。むろん、私は挙手。少なくとも、もう1本手が挙がってもいいはずと思ったが、挙がらなかった。“50代”は同社の保安課長。保安課の部屋で、「あのビラが、保守系の政党から立つうちの会長の顔に泥を塗った。即刻やめてもらいたい」。なるほど、いわれてみればその通り。「文句はありません」と部屋を出ると、秘書課長がそこにいた。「きみの仕事は秘書課の仕事。急にやめると暮らしにも困るだろう。これは少額だがもっていきなさい」。一旦は辞退したが、結局はもらってしまった。そこから引き下がろうとすると、こんどは若い社員が呼び止める。「早稲田にアルバイト求人の電話をしたのは、この私。そのなかから君のような学生が出て、私の面目は丸つぶれだ」。そのあと、バイト仲間に挨拶をして帰ろうと部屋に戻ると、そこにもいました、秘書課の老嘱託。

「あんた、今日はおとなしく帰ってくれるんだろうね」。

「もちろんです。無思想学生、オッチョコチョイのチョイ、ご迷惑おかけしました」

というと、過激な左翼学生と警戒していた嘱託はすっかり安心。

「そうか、そうか、じゃあお別れに一杯やろう」と本社裏の居酒屋に誘われた。

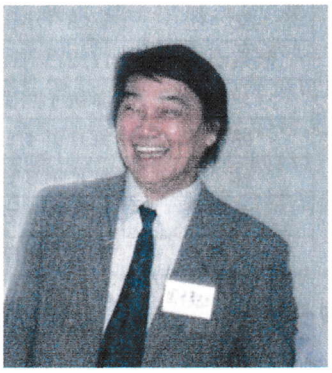
バカな失敗をしでかしたが、サラリーマン社会の一端を垣間見ることができた。帳尻は合うなと、どこまでもおめでたい私は、そう考えることにした。これには、さらに後日談がある。大学３年のとき、東京駅の地下道を歩いていると、「やあ、あのときはすまなかったなあ。一緒にビラを撒いたのはオレだよ」という男に出会った。露文科の卒業だそうで、たぶん左翼系の組織で働いているのだろうと察しはついたが、興味はなかったのでたしかめてもみなかった。

大学４年になると、もう体はボロボロ。体重はなんと４２キロ（現在、６３キロ）。風呂に入ると体が浮いた。風が吹くと飛ばされた。実家に帰って卒業式にも出なかった。

振り返って想うのは、「早稲田即是空」――。

４年間の学生生活は、ただただバイト三昧。フリーターのようにいくつも仕事を漂流しながら、社会のさまざまな局面をみた。人間の現場をみた。胸中、“書斎派”とはちがう“フィールド派”としてのひそかな自負のようなものがないでもなかった。が、しかし学生としてはまぎれもなく空虚、空漠、空洞の「空」でしかなかったことは否めない。

それと、もうひとつ、こんな無頼の徒を特別とがめもせず、また放逐もせず、世に出した早稲田のおおらかな度量、無類の包容力。これこそ天空海闊の「空」ではないか。年齢をかさね、時間的に早稲田が遠くなればなるほど早稲田讃歌の「空」への思いは、ますます深まるのである。



東久留米稲門会小史散歩（その四）

特異な女性サークル・郷土研究会の歩み

東久留米稲門会は特異な女性サークル部会を発足させ、女性会員独自で或は主催で多分野で活動している。

平成8年5月の野崎美術館を皮切りに、飯能ハーブ園（同11月）、山崎パン・ガス資料館（9年5月）、ダニエル・ゲーテと横山幸雄デュオリサイタル（同11月）、早大キャンパスツアー（10年5月）、昭和記念公園バーベキュウ会（11年と15年の10月）、北山公園（12年6月）、いわさきちひろ館（12年11月）、亀戸藤の花園（13年5月）、江戸博物館ポンペイ展（同10月）、小江戸川越ぶらり（14年11月）、唐沢博物館（15年5月）、大多摩ハム工場（同11月）、明治神宮（16年6月）、音羽鳩山館（17年6月）、牧野記念公園（同11月）、シチズン田無工場（18年11月）、府中サントリービールと周辺の名刹（１８年６月　グルメ部と共催）、林芙美子記念館（19年11月）、小山の及川鳴り物博物館（20年9月）と多彩な足跡を残している。

郷土研究会は、“東久留米七福神巡り”（１４年10月）を始めに活動を開始。翌年“水と緑と武蔵野の面影を尋ねて”（１５年９月）を催行、柳窪の旧家（村野家、野崎家）、神社、小平さいかち窪、南沢湧水池、竹林公園を尋ねた。昼食に食した「柳窪うどん」の味は忘れがたいものとなっている。17年10月には市指定無形民俗文化財である「南沢獅子舞」見学を雨天の下挙行。最近では南沢水道施設・自由学園などの見学（20年12月5日−7頁写真参照）を実施した。

東久留米七福神巡り（浄牧院）

会の運営とその活動

名称		説明	内容
定時総会		年度基本方針の決定	4/6 平成20年度　第14回総会実施
役員会		方針の管理	隔月第1日曜
広報	杜の西北	校友に情報を発信する会報紙	年一回　約1200部発行　平成7年創刊
	東稲ニュース	会員に情報を発信する機関紙	隔月　約180部発行　平成13年創刊
	ホームページ*1	早く広く発信する電子情報紙	アクセス数　約23,000　平成13年開設
懇親会		1/26 新年会　4/6 総会　10/15 深秋コンパ	
部会・サークル	講演会	3回実施　*2	
	映画鑑賞会	米光会員の名解説付きで毎回満員(約300名)　(財)豊島修錬会と共催　*3	
	女性	9/28「小山の及川鳴り物博物館」見学	
	散策山歩き	11/21　日和田山から高麗神社を巡る	
	ゴルフ	春秋4回実施（内2回は稲門会及び三田会との対抗戦）	
	囲碁	毎月第4日曜　6/7 オール早稲田囲碁祭　9/28 稲穂会囲碁大会 11/29, 30 合宿	
	俳句	毎月第3日曜　10/19, 20　湯河原で吟行	
	書道	毎月第2日曜　10/29 市民文化祭へ１２名出展　9/5, 6　四万温泉で錬成会	
	太極拳	毎週土曜新体制で実施	
	グルメ	不定期　グルメと街の探訪とをミックスして２倍楽しむ新企画　*4	
	郷土研究	12/5　南沢水道施設と自由学園の見学	
	ウォーキング	山手線一周巡り　JR高田馬場駅から内回り目黒駅まで　第26回～29回	
	カラオケ	7月	
	スポーツ観戦	早慶野球, ラグビー戦	
	芸術鑑賞	3/4 日本フィルコンサート　7/18 中村紘子トーク＆コンサート	
	お誕生会	毎月第3水曜に誕生月の会員と有志会員で祝う	

*1　http://homepage2.nifty.com/35292/
で広報全てが見られます

*2　4/6「中国が“世界の工場”なら日本は“世界のアトリエ”」国米家己三会員
6/1「映画玉手箱の－こぼれ話」米光慶二郎会員
12/6「司馬遼太郎の世界」　米光慶二郎会員

*3　4回開催 1/13「禁じられた遊び」5/30「めまい」
8/20「エデンの東」11/27「シェーン」

*4　3/28　下町名物「土手の伊勢屋」の天丼と浅草演芸ホールで落語を楽しむ
10/21 横浜中華街と山下公園

誕生会第一回（平成19.10）

平成20年度東久留米稲門会収支決算書

（自平成20年1月1日至平成20年12月31日）　単位　円

支出の部		収入の部	
科目	金額	科目	金額
総会費	252,879	総会収入	245,000
通信費	50,030	年会費	477,000
印刷費	11,530	祝金	20,000
消耗品費	26,683	校友会補助金	57,000
交際費	64,500	利息	216
会議費	22,600	雑収入	133,274
部会補助金	90,000	前期繰越金	84,071
「杜の西北」製作費	195,033		
ホームページ	30,000		
イベント補助金	31,965		
寄付金	25,435		
弔慰金	56,500		
繰越金	159,406		
合計	1,016,561	合計	1,016,561

多彩な部活動

お揃いのW－Kマークのオリジナル帽子
三田会とのゴルフ対抗戦

歴史的な建造物が点在する広大な
自由学園を探訪　　郷土研究部会

浅草吉原　老舗　天丼の伊勢屋　グルメ部会

新生太極拳部会

市民文化祭へ出展　書道部会

日和田山　散策山歩き部会

高田馬場玄国寺　ウォーキング部会

第100回記念句会　湯河原吟行　俳句部会

小山の及川鳴り物博物館にて　女性サークル部会

講演会　司馬遼太郎の世界

われらは仲間、稲門会

東久留米稲門会々長　市川　英雄

皆様にはますますお健やかにお過ごしのことと思います。

昨年は後半以降世界的不況が深まり、持ち越しておりますので、本年は波瀾の一年になりそうです。まずは、心身ともに健康で、心豊かに過ごしたいと思っております。

わが母校の募金活動は、昨春目標額を達成しましたが、あらためて皆様のご協力に感謝いたします。明年は校友会設立125周年にあたり諸行事が予定されると思いますが、心のふるさとを再認識いたしましょう。

“袖すり合うも他生の縁”といわれていますが、稲門というベースで結ばれた皆様は「われらの仲間」です。会の諸行事に積極的に参加して友好を深め、日々の生活の潤いとしてください。

皆様のご健勝を心からお祈りいたします。

21年度事業計画

Ⅰ　基本方針　1)会員相互の親睦をはかる　2)早稲田大学の発展に寄与する　3)東久留米市の発展に寄与する

Ⅱ　実行計画　1)サークル活動の推進　2)広報活動充実　3)近隣稲門会、三田会との交流活発化　4)校友会会費納入キャンペーンの協力　5)大学、校友会主催会議、行事への参加　6)三多摩支部主催行事への参加　7)映画鑑賞会の定期開催　8)当会主催講演会の定期開催　9)新企画の開発と実施

Ⅲ　会員増計画の推進　1)魅力ある当稲門会を多くの校友に知ってもらう　2)会員周囲の未加入校友に働きかけをする　3)総会案内、「杜の西北」配布時に入会を働きかける

早稲田を思い、東久留米を語るコミュニティ　―　東久留米稲門会入会の勧め

親睦、自己啓発、母校・地域社会への貢献を目的としています。政治、宗教、営業とは一切無縁です。
互いに見聞を深める、体を鍛える、或いは趣味を生かす身近なコミュニティです。多彩な部会が同好の士の集まりで活発に行われています。お望みの同好会の創設も可能です。
年会費3、000円。入会金不要。

お問い合わせ・お申し込みは　・・・事務局・平山正徑　TEL473－3289まで。

惜　別

岡田　富雄さん	（昭和３５年・法）	平成20年6月逝去
安楽　孝雄さん	（昭和４９年・商研-博）	平成20年7月逝去
深沢　政次さん	（昭和２８年・政経）	平成20年9月逝去
坂本信太郎さん	（早大名誉教授）	平成20年9月逝去

ポケットパーク（編集後記）

○“温故知新”、そんな思いもあって、当地ゆかりの早大先達の追跡を試みた。そして大正期に二人の早大生に遭遇することが出来た。両先輩の足跡を辿ることによって、より早稲田を知り、よりわが町東久留米を身近に感ずることにもなった。隠れている史実はまだまだあるに違いない。後日の探求に委ねたいと思う。

○取材にあたり、両先輩のご子息である藤井猷孝さん、村野建彦さん、そして矢部不三雄さんには一方ならぬお世話、ご協力を戴いた。ここに深甚なる謝意を表します。（比護）

「杜の西北」第15号　2009年3月
発行人　市川英雄
編集人　比護喜一郎
編集委員　松崎　博　菱山房子　河村洋子　伊東　毅
事務局長　平山正徑
題　字　高橋　勤
印刷所　㈱国栄
東久留米市八幡町3-6-22
TEL.042(471)1261(代)